学校教育実践学研究，2013，第19巻，259－270頁

大学院生によるアメリカの小中学校における体験型海外教育実地研究報告Ⅵ

小原友行・深澤清治・朝倉　淳・松浦武人・松宮奈賀子・佛崎はる菜*
横井涼也*・大谷祐貴*・瀬戸康輝*・西村祥太郎*・森　玲薫*・北村真理子*
（2012年12月７日受理）

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary/Secondary Schools in the United States (Ⅵ)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA,
Nagako MATSUMIYA, Haruna BUTSUSAKI, Ryoya YOKOI, Yuki OTANI, Koki SETO,
Shotaro NISHIMURA, Reika MORI and Mariko KITAMURA

Abstract. The present short paper reports on the 6th overseas teaching practicum in the United States by six graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center since 2007. The students majoring in elementary and secondary school education planned and conducted lessons in English in three local public schools in North Carolina. This project aims to achieve the following three goals: 1) to self-develop practical instructional competence by teaching pupils with different cultural backgrounds; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. In addition, the teaching experience was followed by cross-cultural study visits to Raleigh and Washington, D.C. Among the major achievements by the participants were enhanced awareness and skill of lesson planning/implementation and empowered classroom communication skills in English. It is hoped that this experience abroad will help to enhance the students' professional competence in teaching.

1　はじめに

「体験型海外教育実地研究」は，広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が企画しているプログラム（2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目）として始まったが，本年度は第６回目の実施である。本年度は，博士課程前期１年の大学院生６名（初等２名，中等４名）が参加して実施された。本年度の特徴は，これまでで一番多い４名の中等の参加者があったことである。

この授業科目の大きな特色は，次の３点である。

① 言語に頼らない授業実践が求められるため，米国の児童・生徒理解に基づく教材や指導方法の開発・工夫を行う実践的指導力を自ら形成できること。

② 日本文化に関する教材を開発し，それを米国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという実体験や，現地での多様な学校や優れた教師による授業の見学を通して，文化の相互理解を図るための教材開発の力量が形成できること。

③ グローバル・パートナーシップを推進するために必要なプログラムの開発・企画・実施・評価を行う力量が形成できること。

授業は前期の集中科目の位置づけであるが，実際は年間を通したプログラムとなっている。具体的には，４～８月の事前の教材研究，９月15日～24日の米国ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立小・中学校（ウォールコーツ小学校，エルムファースト小学校，C.M.エッペス中学校）での教育実習と私立のピータース・カソリックスクール（幼小中一貫校）の施設・授業見学と児

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

童・生徒との交流，州都ローリー市内のイクスプローリス中学校での生徒の案内による施設・授業見学と博物館を中心とした教材調査，首都ワシントンＤＣでの多文化理解学習のための教材調査，そして10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成，12月の研究成果報告会となっている。

なお，本年度は，７月７日に開催された第８回の学校間交流国際フォーラムのために実習校であるC.M.エッペス中学校の教員とイクスプローリス中学校の元校長，そしてGPSCのパートナー校であるイーストカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生の３名に来日してもらったこともあり，事前の指導案検討や現地での授業実践がより質の高いものとなった。また，米国での実施にあたっては，前述のサンドラ・ウォーレン先生から献身的なサポートをいただいた。以下では，本年度の概要，参加者の報告，評価について紹介していきたい。

2　2012年度「体験型海外教育実地研究」の概要

⑴　全体日程

2012年度，本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

４月 ６日（金）	2012年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
４月26日（木）	本授業の概要と計画説明
５月18日（金）	授業研究テーマ案の発表
６月 ７日（木）	学習指導案の検討⑴
７月 ２日（月）	学習指導案の検討⑵
７月 ７日（土）	第８回学校間交流国際フォーラム参加
７月 ８日（日）	2012年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
８月 ２日（木）	学習指導案の検討⑶および教材・教具の検討
８月30日（木）	学習指導案の検討⑷，教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
９月11日（火）	渡航前最終打合せ
９月15日（土）～９月24日（月）	米国における「体験型海外教育実地研究」
12月13日（木）	「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

⑵　現地での日程

９月15日（土）	広島出発，米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
９月16日（日）	授業準備および授業打合せ
９月17日（月）	グリーンビル現地学校訪問（観察，一部実習）
９月18日（火）	グリーンビル現地学校訪問（実習）
９月19日（水）	St. Peter's Catholic School訪問，グリーンビルからローリーへ移動
９月20日（木）	Exploris Middle School訪問
９月21日（金）	ローリーからワシントンへ移動
９月22日（土）	ワシントン研修
９月23日（日）	ワシントン出発，機内泊
９月24日（月）	広島到着

⑶　参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には，前述のとおり大学院生６名が参加した。なお，参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

また，アメリカへの訪問は行わなかったが，大学院生１名が国内における学習会およびワークショップ等への参加を通してグローバル・パートナーシップ推進に係る授業開発等について共に検討を行った。

参加学生の現地での学校配置，担当者，参加者，引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【Elmhurst Elementary School（K-5）】
実施校担当者：Ms. Wanda Williams
参加者：横井涼也・森　玲薫
引率者：深澤清治・松浦武人

【Wahl-Coates Elementary School（K-5）】
実施校担当者：Ms. Cindy Watson
参加者：佛崎はる菜・瀬戸康輝
引率者：松宮奈賀子

【C.M. Eppes Junior High School（6-8）】
実施校担当者：Ms. Joanne McClellan
参加者：西村祥太郎・北村真理子
引率者：小原友行

3　参加者の報告

参加者（６名）は，各校において実践した授業に関する「ねらい」，「概要」，「成果と課題」および授業の準備から実践を通した「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

第３学年 異文化理解 “Let’s enjoy UCHIWA！”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　佛　崎　はる菜

１　ねらい

本授業のねらいは，２点ある。１点は，夏に日本で多く使われている「うちわ」について理解することであり，もう１点は，「うちわ」を通して日本とアメリカの子どもたちの交流をすることである。

２　概要

⑴浴衣を着て登場し，自己紹介を行った。自己紹介の中で，浴衣と「うちわ」についても同時に紹介を行った。その後，「うちわ」に関するクイズを２問行った。１問目は「うちわ」の名前についてであり，２問目は「うちわ」の使い方について出題した。

⑵「うちわ」の制作を行った。まずは，自分自身の制作した「うちわ」を提示し，夏の思い出を描いたことを伝えた。その後，どんな夏休みを過ごしたのかを問い，同じように「うちわ」に絵を描くように指示をした。制作過程としては，白紙のシートを配りそこにそれぞれの夏休みの思い出を描くようにした。

⑶最後に，日本の子どもたちが描いた「うちわ」を配布した。

その後に，もう片面に授業で描いた「うちわ」を貼り完成させた。

３　成果と課題

成果として２点を挙げる。

〇子どもたちに興味・関心を持たせることができた。

〇子どもたちとコミュニケーションを取ることができた。

浴衣を着て登場したり，「うちわ」のクイズを行ったりすることで，子どもたちの日本や「うちわ」への興味・関心を引くことができたと思う。また，英語は話せないが積極的に子どもたちの活動の様子を見て回り，話を聞いたり，「good!」など褒めたりコミュニケーションを取ろうとする姿勢で臨むことができたと考える。

課題としては３点を挙げる。

●英語力の低さから，子どもたちからの質問にすぐに対応することができなかった。

●活動の順番などを具体的に示した教具が準備されていなかった。

●最後に伝えたいことを伝えることができなかった。

活動中には，子ども達から質問が出された。しかしながら，自身の英語力の低さから質問を聞きとることができなかった。また，授業の順序を示した教具は準備していたが，活動の順番の順序を示した教具を準備していなかった。これらのことが授業をスムーズに行うことができなかった要因だと考える。また，その結果時間が無くなってしまい，最後に伝えたいことを伝えることができなかったことが大きな課題として挙げられるだろう。

【自己の変容】

私が，本授業を通して変容したと考えるのは「授業観」である。本授業では，課題に挙げたように，英語力の低さから伝えたいことを十分に伝えることができなかった。しかしながら，子どもたちは真剣な眼差しで，私の意図を汲み取ろうとする姿勢を見せてくれた。このことから，「子ども」がいるからこそ，私は授業を行うことができ，先生として教壇に立てることを実感した。また他にも，笑顔で接すること，明るく快活な態度を示すなどのノンバーバルな部分は，全世界共通の授業の大切な部分なのではないかと考えた。以上のように本授業を通して，「授業観」が深まったと考える。

第４学年 社会科 “Simpson’s family and Isono’s family”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修　横　井　涼　也

１　ねらい

本授業のねらいは，①アメリカの子ども達の間で人気のあるシンプソンファミリーとサザエさんの家の間取りを比較することを通して，個人を尊重するアメリカと共同性を尊重する日本の価値観の違いに気づく，②両家の間取りの同じ点であるリビングやダイニングから，アメリカも日本も，家族を大事にする姿勢は同じであることに気づく，の２点である。

また，家具や部屋の作りといった個別の事象から，日本人の生活を想像し，より一般化された価値観の違いという概念に近づけることも隠れた目標としてあった。アメリカの子ども達が，日本の小学校社会科の授業理論（対象への理解から説明し，想像につなげる）のもとでどのような思考過程をたどるのかを観察することも期待していた。

２　概要

⑴自己紹介の後，簡単なアイスブレイクを行った。

⑵シンプソン一家の紹介から，一家がサザエさん一家の家へ遊びに行くスライドショーを提示した。

子どもたちの反応はよく，登場したシンプソン一家や，サザエさんのアニメーションに見入っていた。

⑶主要発問「ホーマーは，サザエさん一家の家について，どんなことを驚いたのか」を投げかけた。

子どもたちは，「家の大きさに驚いた」や「どこにいるのかわからなかった」といった，物語の筋書きや図の大きさに注目して意見を出していた。「家の大きさに驚いた」を注目して取り上げ，何故こんなに大きな家なのか，という問いかけをした。ある子どもから，一つの部屋を複数の人が使っているという意見が出されたため，日本の家族の協同性とアメリカの家族の独立性というまとめにつなげた。

⑷最後に，両家を比較して共通な点を述べ，日本もアメリカも家族を大事にしていることは同じであることを伝え，自身の家族について紹介することをもって授業のまとめとした。

３　成果と課題

授業計画では，子どもの意見から授業の目標達成へと導いていく過程を計画していた。しかし，子どもの家についての想像を引き出すための間取り教材の示し方に問題があり，伝達型の授業になってしまったといえる。平面的な図では，子どもが内部を想像できるようにすることには限界があった。より写真を多く配するなどして，家の中での人の生活まで豊かに想像できるように働きかけることができなかった。

ただ，家のなかでのライフスタイルの違いや，家族の形態に関していくつかねらいに即した子どもの発言を得ることができた。また，子どもの発言からさらに発問を展開させたり，理由を尋ね返すようなやりとりを展開できた。言葉が通じづらいなかでも，子どもの発言によって授業を構成しようと積極的に働きかけることが成果として挙げられると考える。

【自己の変容】

大きな言葉のように感じる「国際」は，結局は「人の際」であったように思う。言葉や外見といった壁は，日本にいても自分自身が他人に対して持つ心の壁の延長にすぎなかった。壁を普段よりも意識する海外での授業や生活は，そうした壁を乗り越えて人とつながることの大事さを認識させてくれた。

また，「考える」という行為は，人間に本質的な営みであり，世界共通であることを実感させられた。授業のなかで発した発問に反応する子どもや，子どもの思考を高めようとするアメリカの先生方の指導理論にそうした営みを見つめることができた。将来の教え子にも，「考える」ことの大切さ，楽しさを伝えていきたいと強く思った。

第５学年　異文化理解　“Let’s compare Japanese Heroes and American Heroes”

教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修　瀬　戸　康　輝

１　ねらい

現在，日本のマンガやアニメなどの文化が世界中で人気を博している。アメリカにおいても日本のマンガやアニメは非常に人気が高いと思われる。その人気の理由について考えると，マンガやアニメに登場する主人公，ヒーローの勇気や正義，努力といった感情・行動に共感できる面があるからではないかと考えた。単に日本の文化を紹介するだけでは異文化理解にとどまる。異文化との差異性とともに，日本とアメリカで共通する感情・価値観といった普遍性を伝えることが多文化共生には欠かせない。ヒーローとは人々の正義感や平和への願いを体現した姿であり，日米のヒーローを比較し，その共通点を見出すことで，国境を超えた正義感や平和への願いを子どもたちに伝えることができると考え，それらを目標とした本単元を設定した。

２　概要

まず簡単な自己紹介を行い，今回の授業のテーマを説明した。そのなかで今回取り上げるヒーローを映画やマンガ，アニメーションに限定することを説明した。

次に日本のヒーローを，パワーポイントを使ってその特徴とともに紹介した。

そして，生徒たちにアメリカのヒーローを紹介してもらうために，ワークシートを配布した。アクティビティの内容やワークシートの記入事項はパワーポイントを使用して伝えた。その後，何人かの生徒を指名し，自分が書いたワークシートをもとにヒーロー紹介のプレゼンテーションを行ってもらった。

最後に，日本とアメリカのヒーローを比較し，「ヒーローの共通点は何か」と問いかけ，「ヒーローが人々を守るために特別な力を使っている」ことに気付かせ，日本とアメリカに共通のヒーロー像，つまり正義感や平和への願いの国境を超えた普遍性を理解させた。

３　成果と課題

マンガやアニメのヒーローを題材にすること自体は生徒の興味・関心を引き付ける点では非常に有効であったと思う。そしてパワーポイントの活用により授業全体はスムーズに展開し，伝えたい内容もある程度は伝えることができたように思う。しかし，自身の英語力のなさの不安から，パワーポイントに頼りすぎてしまい，生徒との授業の中での交流ができなかったことが今回の実践で悔やまれる点である。もちろん，授業時間が30分しかなく，授業後半の生徒とのやり取りに時間をさけなかったことも要因ではあったが，生徒と交流する場面を授業の中にあまり設定していなかったことが最大の要因であった。本実践において最もキーとなる「日本とアメリカのヒーローを比較すること」を中心にして，生徒との交流にもっと力点を置いた授業展開を行う必要があったように思う。

【自己の変容】

課題にもあったように，自身の授業の最大の欠点が教師からの一方通行的なコミュニケーションであることを実感した。これは日本で行った授業にも共通するものであった。訪問した学校の一つであるExploris M.S.では生徒主体の授業が多く見られた。授業において教師と生徒の関係はいかにあるべきか，生徒主体の授業の時の教師の役割とは何なのか。答えはまだ見つかっていないが，今回の研修で自身の教育観，授業観を見つめなおすことができた。

第５学年　社会科　“Let’s study from money!”

教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修　森　　玲　薫

１　ねらい

本授業では，日本の通貨の中でも５円玉を教材として取り上げ，そのデザインに込められた願いを紹介することをねらいとした。通貨にはその国の偉人や歴史，文化，希望などが描かれることが多く，これは日本の通貨にもアメリカの通貨にも共通していることである。このことを通じて，現代を生きる子どもたち自身に自国（アメリカ合衆国）の通貨をデザインさせることもねらいとした。

２　概要

⑴自己紹介と授業を始める前のウォーミングアップを兼ねて，自分の名前の漢字をクイズにして紹介した。

⑵日本の通貨の実物（1,000，5,000円札，500，100，10，１円玉）を子どもたちに手にとってもらい形や色，何が描かれているか等，気づいたことを発表してもらった。

⑶日本の通貨には，人物や建造物，日本の歴史，文化などが描かれているが，このことはアメリカの通貨にも言えることであり，共通していることを理解させた。

⑷５円玉が写っている写真を見せ，このように穴が開いているお金を見たことがあるか質問した。穴開き硬貨はやはり珍しかったらしく，子どもたちは目を丸くして見入っていた。

⑸実際の５円玉を１人に１枚ずつ配布して，そこに描かれている絵の意味は何か質問した。

⑹５円玉のデザインには，日本の産業の発展と民主主義への願いが込められていることを説明した。

⑺子どもたち自身に，自国の通貨をデザインさせた。その際，アメリカが将来どのような国に発展していってほしいかという自分の願いや希望を込めるよう説明した。

⑻現代の日本の子どもたちが自国の将来に何を願っているかを表すものとして，東日本大震災で被災した子どもたちが描いた絵を紹介した（宮城県の公立小学校の提供による）。

⑼最後に５円玉をプレゼントし，クラスで写真を撮って授業を終了した。

３　成果と課題

○授業時間を75分と長めに設定してもらえたため，子どもたちの活動時間を長くとることができた。
○日本のお金に対する子どもたちの関心が強く，積極的に授業に取り組めていた。
○担任のCarol先生の補助もあったおかげで，全員の子どもたちが活動の趣旨を理解できた。
○子どもたちの自由な発想を表現する機会を持てた。
●自分の語彙力不足から，子どもたちの意見を正確に理解，反映することができなかった。
●発言が多い子どもに目を向けてしまいがちになり，一人一人に声かけをすることができなかった。

【自己の変容】

英語での指導案作成や授業の構成を考える過程は苦労したが，結論をわかりやすく伝えるために工夫する，そのためには簡潔にまとめる，ということを意識する機会を持てた。教材研究から得た知識や，自分が関心を持った内容は，つい時間をかけて説明したくなってしまうものだが，子どもたちは教師のわずかな説明の中からでも自身たちの頭で考え，自分の知識や経験に置き換えて学んでいくことがわかった。

また今回の授業は，「こんな私でもできた」ではなく，「これは私にしかできなかった授業だ」と実感できたことで，自分に自信をつける良い経験になった。

第６学年　異文化理解　“Write our first name in KATAKANA”

教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修　西　村　祥太郎

１　ねらい

我々の生活は様々な外来語で溢れている。特にアメリカをはじめとする英語圏からのものが多数を占めている。一方アメリカでも「sushi」「karaoke」など，日本からの外来語が頻繁に使用されるようになっている。生徒たちにとって，このような社会を把握し，異文化の言語に理解を深めることは大変意義深いことだと考えた。

そのため本単元では，日米それぞれの文化に起源をもつ言葉が各国で使用される言語に変換されて使用される「言葉のグローバル化」を理解させ，実際にカタカナの表を見ながら生徒自らのネームカードをカタカナで作成することを目標とした。

２　概要

まず簡単なあいさつを行い，日本について知っていることを聞いた。

次に，授業者の名前を「アルファベット」「漢字」「ひらがな」「カタカナ」で紹介した。

そして，漢字がどのようにかな文字に変化したかを示した表を提示し，授業者の名前の漢字表記とひらがな表記を比較させ，生徒にかな文字の一覧表を配布し一緒に読む活動を行った。

それから，日米それぞれに起源をもつ言葉が外来語として使用されている事例を，「日本ではカタカナでこのように表記・発音されるが，アルファベットではどのように表記されるか」といった発問を行うことで，授業者と生徒のコミュニケーションを図った。

最後に，カタカナで自分の名前を書かせる場面では，完成例や注意点，例を示した上で，先に配布したかな文字一覧表を参考に授業者らの補助を交え，ネームカードを完成させた。

３　成果と課題

結論から述べれば，生徒にとって難解な内容に取り組ませるための手立てが不足していたために上手く行かなかった。その理由として，生徒と円滑なコミュニケーションをとるための英語力の不足や生徒が持つと考えられた疑問を予想し，適切な応答を準備していなかったことが挙げられる。

その一方で，見たこともない言語で自分の名前を書く活動に生徒はかなり関心を持ってくれていたのではないかと考える。「分からないから教えてくれ」と質問する生徒は，活動の時間中絶えることはなかった。授業の最後には担任の先生も活動に取り組まれており，取り扱う題材自体は良かったのではないかと言える。それだけに細かい準備を事前に行っておけば，良い結果の伴う授業になったと考えられる。

【自己の変容】

人格形成を重要視した日本と同様の教育観や日本に見られないほめる文化，大学院生の学ぶ意欲の高さ，そしてコミュニケーションにおける「伝える気持ち」の重要性など，この研修に参加しなければわからなかったアメリカ文化を知ることが出来た。このように見習わなければならない部分が多々あると考えさせられる一方で，日本文化の良さを客観視することが出来た。

今後海外に行く機会に恵まれるか分からないが，これらの貴重な経験を日々の生活で活かし，また英語力など足りない資質を高めていかなければならないと考える。

第８学年 異文化理解 “Let’s Compare American and Japanese Events”

教育学研究科言語文化教育専攻英語文化教育専修　北　村　真理子

１　ねらい

本授業のねらいは，生徒たちが日米の祝祭日の比較を通して，自国の文化と他国の文化に興味・関心をもつことである。また，日本の中学生がアメリカの生徒とのコミュニケーションを通して英語を学ぶことの意義・楽しさを実感してくれること，アメリカの中学生が日本に興味をもって視野を広げてくれることを願い，この単元を設定した。

２　概要

⑴ 自己紹介の後，授業の目標である「日本とアメリカを比較して，お互いの文化の類似点・相違点を学ぶこと」を確認した。

⑵ ピクチャーカードを使用して，日本語で数字をどう表現するかを導入した。英単語をベースにピクチャーカードを作成していたためクイズ形式で質問し，生徒が答えを予想できるようにした。

例)「蚊にさされた時，どのように感じるか」→「itch」→「１」

⑶ １～12までの数字が，身の回りのどのような所で使用されているかを生徒に質問し，カレンダーを使用して日本とアメリカの文化を比較する活動につなげた。

⑷ 日本の生徒が書いたカレンダーを見て，自分が好きな祝祭日についてグループで話し合わせた。自国の祝祭日を振り返ることで，日本の祝祭日と比較をしやすくする目的であった。

⑸ 日本の生徒が出すクイズに，グループ対抗で答える活動を行った。プレゼンテーションソフトに組み込んでいた画像が上手く動かず，生徒の出す問題を私が読み上げる形となった。クイズの得点は生徒に得点カードを引かせ，毎回得点が異なるよう工夫した。クイズや私の説明を聞いて得た新しい情報は，カレンダーに書き込むよう生徒に指示をした。

⑹ 時間が足りず，クイズが途中で終わってしまった。２時間授業をしてもよいと言われていたため，生徒とインタラクションを取りすぎてしまったところに課題があった。優勝グループには日本語で書いた賞状と景品を渡した。また全員の積極的な取り組みを称え，他のグループにも景品を渡した。

⑺ クイズ終了後は，互いの文化の類似点や相違点をグループで話し合った後で，日本の生徒からの手紙を読ませ，返事を書かせる予定であった。その活動はJoanne先生にお願いした。

３　成果と課題

授業準備を入念に行ったこと，私自身が楽しく授業に取り組めたこと， 生徒一人ひとりとたくさんのインタラクションをとれたことで，生徒も積極的に授業に参加してくれた。時間配分が上手くいかなかったが，生徒たちは「楽しく日本のことが学べた」「自国との違いを学べた」というような振り返りをくれた。返事を受け取った日本の生徒からも，「もっと英語を勉強したい」「日本のことももっと知らなければ」という感想が返ってきた。上記の感想から，本授業のねらいは達成されたと考える。今後は，英語力，パソコン操作の技術を磨いていきたい。

【自己の変容】

久しぶりの授業を通して，生徒がいてこその教師，授業があってこその教師ということを再認識し，教師である自分を見つめ直すことができた。また，アメリカの人達の温かいホスピタリティーに触れ，人との出逢い，つながりをもつことの素晴らしさを感じた。学び続けようとする姿はもとより，人とのつながりを大切にする姿を生徒に示すことができるような教師になりたいという意欲が高まった。

4　本年度の授業の整理と考察

⑴　本年度の授業

2012年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は，次のとおりである。

表１　実施授業の学年と教科等

授業	学年	教科等，題材・テーマ*
A	4	異文化理解 Let's Enjoy UCHIWA !
B	4	社会科 Simpson's family and Isono's family
C	5	異文化理解 Let's compare Japanese Heroes and American Heroes
D	5	社会科 Let's study from money !
E	6	異文化理解 Write our first name in KATAKANA
F	8	異文化理解 Let's compare American and Japanese Events

＊「教科等，題材・テーマ」は，参加者（授業者）が付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

⑵　事前の取り組みについての考察

参加者は，日本での事前学習会において，授業の目標，内容，教材，学習過程などについて相互に協議・検討し，具体的な準備を進めた。また，英文の指導案を作成し，7月に実施した授業研究ワークショップにおいて，イーストカロライナ大学教育学部のウォーレン先生，元イクスプローリス中学校長のケビン先生，エッペス中学校のマクレラン先生から，教材構成についての助言や児童生徒の実態に基づく助言をいただき，指導計画の改善を図った。

本節では，これらの事前の取り組みの中で，ワークショップへの参加に焦点を当て，院生のふり返りの記述をもとに，その取り組みの成果について考察する。

ワークショップに参加した院生の内，9月に実施する授業についてのプレゼンテーションを行った院生５名は,次のようなふり返りを記述している。

・海外の先生方が私の稚拙な英語に対しても真剣に話を聞いてくださっている姿を拝見し，「もっと，スキルアップしたい！」と思った。また，質問を通して子どもたちの実態を理解することができ，ワークショップを行う前より，授業についてのイメージを持つことができた。また，実際に海外の先生方にお会いするまでは，考えている授業が本当にできるのか不安もあったが，実際にお顔を拝見しながら会話し，授業の改善点をアドバイスしていただくことで，不安が減り，安心して，当日まで前向きに準備を進めることができた。

・一番課題に感じたことは，自分の英語力のつたなさであった。授業の内容説明においても，そのことが原因で，お聞きしたいことや伝えたいことが胸の中でつまることが何度もあった。反面，英語でうまく表現できないことは想定できたので，自分を助けるツールをいくつか用意することができたと思う。その一つがパワーポイントによる発表であった。パワーポイントでは，授業で説明する際に最低限必要な要素を盛り込み，英語で予め表現しておいた。授業のねらい，方法，必要な準備，授業で一番伝えたいことなどである。結果として発表はスムーズにいったと感じている。

・英語でプレゼンテーションをすることは何度か経験していたが，自分の考えを伝えることは大変難しいことであった。慣れない言葉を使用するときは，いつも以上の準備を行った上で本番に臨まなければならないと切に感じた。それでもある程度の単語を並べて話すことで，授業の要旨程度は伝わったのではないかと感じた。これまでは英語で話すことにかなり高いハードルがあるのではないかと思い込んでいたが，それは間違った認識であることに気づいた。「まずは伝えてみる」という気持ちが，その後のアメリカ滞在中の様々な場面で活きたのではないかと考える。

・英語の表現にも細かな違いがあることを学んだ。具体的には，私の指導案には「…について知る」は，Know about と訳したが，learn about と表す方が，より学習するという目的に近い英語になるということ，また，「お金に

ついて学ぶ」という表現もlearn about moneyよりも，Learn from money と訳した方がmoneyそのものを学ぶのではなく，moneyを通して〇〇を学ぶ，というように，学習本来の主旨にあった表現になることを学んだ。
・モノローグ形式で説明することの難しさを感じた。院の授業においても英語での発話の機会は限られているため，練習の必要性を痛感し，リスニングの本を購入した。新しい語彙や表現を少しずつでも身につけられるよう，毎日の習慣として今後も続けていきたい。

これらの参加者のふり返りの記述から，ワークショップへの参加による成果を，次のように整理することができる。
・９月に実施する授業の目標・内容・方法を焦点化・明確化することができる。
・教材に関して現地の児童生徒が有する知識や技能，見方・考え方などの実態を把握し，教材構成に改善を施したり，綿密な準備を行ったりすることができる。
・英語を用いて会話をしたり授業を行ったりすることへの不安を減少させるとともに，一層英語力を身につけることへの意欲・関心を高めることができる。

また，アメリカへの訪問は行わないが，国内の学習会に参加してきた院生１名は，ワークショップを自分たちで主体的に企画・運営するための中心的な役割を担った立場から，ワークショップへの参加を次のようにふり返っている。

７月８日に行われたGPSCのワークショップでは，現地の先生方３人をお招きし，５人の大学院生による授業提案が行われた。しかしこの数日前，国内支援者の立場からみて，慣れない英語での説明に加え，提案時間15分程度という難しい条件下において，授業提案者たちは十分な説明を行うことができるのであろうかと疑問に感じた。そこで，説明時間の短縮及び提案内容の理解につながるよう留意しながら，６人の提案者が取り上げる教材を説明する資料を作成することにした。資料作成に際して注意を払ったのは，次の点である。
・それぞれの教材が，日本ではどのように認識されているかの説明。
・教材のよさを印象付けることのできる写真の選定。
・以上が授業者の教材選定意図に沿うよう配慮すること。

このように作成した資料（所要作成時間１人分約１時間）であるが，この資料が大学院生の授業提案の補助及び現地の先生方の理解にどの程度役立ったかはわからない。しかし，言葉の壁や教材に対する認識の差を埋めるといった観点から，また作成者自身の語学力や自国及び異国文化への理解度の強化という観点からも意義深い作業であったと考える。以上，ワークショップの内容を中心に国内支援者の立場から報告を行った。

私は元々英語にひどい抵抗を持っていた。しかし，４月から９月までの活動（授業検討会やワークショップ等）を通して，日本以外の方たちと意見を交わすことや異文化に触れることが自分自身の日本文化に基づく固定概念を変えていくことを実感した。以上の経験から，異国に関わることのよさに気付くことができるGPSCのような体験活動を推進していくことが，英語に対して抵抗がある方々の認識を変え，世界でも活躍できる場を見出していくきっかけを与えることにつながるのではないだろうかと考える。
（大谷　裕貴）

この院生は，国内学習会のみの参加であり，自分自身は米国で授業を実施しない学生であるが，ふり返りの記述に見られるように，授業を行う参加者一人一人の授業についての補足資料を，米国からの助言者に少しでも理解していただけるように，また，参加者（提案者）が提案の意図を短時間で伝えることができるようにと，他者の立場に立って，授業内容に関する具体的・視覚的な資料を添えた英文の説明文を作成している。さらに，上掲のふり返りには記述されていないが，ワークショップ当日の詳細なプログラムの企画・作成，会場の計画・設営（機器，机の配置，名札の作成）等，ワークショップを主体的に企画・運営する中心的な役割を務めていた。このような参加者の意識や活動自体が，本授業科目の目標の一つである「グローバル・パートナーシップを推進するため

に必要な資質の育成」を具体的に示すものであり，本授業科目の成果であると捉えている。

⑶　授業についての考察

前節で述べた日本における事前の学習会，ワークショップに加え，現地ではさらに受け入れ校の関係教員との事前の打ち合わせや児童生徒の観察を通して，最終的な指導計画のチェックを行い，授業に臨んだ。

本節では，本年度実施した授業について，各自の報告書の記述を中心に考察し，主な成果と今後の展望を整理して示す。

①　新教材の開発

本年度は，日米の児童間でのうちわの絵柄の交流・合作⒜，日米の家の間取りの比較による価値観の理解・共有⒝，日米のヒーローの比較による共通点（願い）の理解・共有⒞，日米の通貨（絵柄）の比較・デザインによる共通点の理解・共有⒟，日米相互の外来語を用いた言葉のグロール化についての理解⒠，日米の祝祭日の比較による相互の文化への興味・関心の喚起⒡等，日米の文化の比較・考察を通して価値観の共通点・相違点の理解を促す教材が新たに開発された。何れの授業においても，米国の児童生徒が日本文化と自国の文化の共通点・相違点に興味・関心をもち，目的意識をもって主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。

今後は，これらの成果をもとに，米国の児童生徒の反応や作品を日本の児童生徒に紹介したり，同内容の授業を日本の児童生徒を対象に実施してその反応を比較・検討したりする取り組みも期待したい。

②　授業の目標，内容，方法の焦点化・明確化

前節で述べたように，事前の学習会やワークショップを通して，授業の目標，内容，方法が焦点化・明確化されていたため，米国の児童生徒が，教材化された日本文化とのかかわりを楽しみながら，本時の目標を達成することができた。

しかし同時に，授業準備の段階で授業の目標，内容，方法が焦点化・明確化されることによって，授業準備の段階で整理・構成されたパワーポイント等の提示物の内容に縛られた価値を指導・伝達する授業展開になりがちであるという課題も浮かび上がった。指導者として，本時の目標，内容，方法を焦点化・明確化した上で，児童生徒が一層主体的に活動できる場を保障し，柔軟で多様な見方・考え方を交流・共有しながら本時の目標達成に到るような授業構成の工夫を期待したい。

③　多様な表現方法の工夫

参加者の多くは，本時の目標を達成するために，電子黒板を用いた言語の視覚化ならびに現実の映像やモデル（絵図）の提示，具体的な操作活動，試演など，音声言語（英語）による表現・コミュニケーションを補う様々な表現方法を工夫している。

教員のグローバルな資質の一つとして，外国語や母国語の言語能力を一層高めるための努力をするとともに，言語のみに頼らない多様な表現の工夫・関連づけを通して，児童生徒の学習内容の理解を一層深める努力を今後も継続してほしいと考える。

本節に示した成果と展望に基づく今後の実践・体験が，参加者の授業構成力及び実践的指導力の一層の向上につながることを期待している。

5　おわりに

発足から６年目を迎えた本プログラムは、2009年度からは教育学研究科・教職高度化プログラムの選択科目として位置づいてきた。毎年９月中旬の現地実習に向けて数回の事前・事後指導を重ね、模擬授業を行いながら授業計画を練りあげ、現地では受入校との事前打ち合わせに臨んだ。さらには広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センターの協力を得て、アメリカからの初等中等教員を招いて指導案検討に協力してもらったことで、教育を通した国際交流に大きな成果が得られた。参加者からの報告や引率者の観察をもとに、本年度のプロジェクトを総括し、来年への課題を考える。

参加者６名の声および指導教員の声を集約すれば，次の３点にまとめられる。第１に、開発された教材は日米の文化の比較・考察を通して、米国の児童・生徒に自国の文化や日本文化を深く考えさせるように工夫され、その結果、問題解決型の授業が増えてきたことが挙げられる。単なる日本文化の紹介に終わらない授業設計、実践を行うことで、例年にもまして高いレベルの授業展開が見

られた。

第２に、出発までのセメスターでの事前指導を通して、授業の目標、内容、方法がさらに焦点化されてきたことが認められた。十分な準備により、授業において予定した内容を英語で伝えることに拘泥するのみではなく、米国児童・生徒との関わりを楽しみながら授業目標を達することができたのは大きな成果であった。米国側の協力教員からも、この点について高い評価が寄せられた。

第３に、英語の使用と、目標達成のためのツールとしての教材・教具などの使用においても工夫が認められた。年々、言語面での苦労は少なくなってきているように思われる。また教材・教具などの工夫によって、伝える内容のおもしろさで現地の生徒を引きつけようとする努力も認められた。

また、今年度の特別企画として、イーストカロライナ大学のサンドラ・ウォーレン先生のお計らいで、同大学の教職専攻大学院生と、「南北戦争時代の奴隷制度」についての授業を体験できたことは、参加者にとって小・中学校での実地研究に加えてもう一つのハイライトとなった。参加院生が現地学生と授業に参加し、英語で情報・意見交換を行う場面は、近未来のグローバル社会における教育の在り方を予感させた。来年度以降もこのような機会を含めることの可能性を考えたい。

最後に、次年度以降に取り組むべき課題として、本実地研究のために計画・実施した授業を今後、日本の学校でどのように修正、再生するか検討することが考えられる。日本文化に根ざした自らの授業実践を客体視する経験を持つことが、実践指導力をさらに促進することに期待したい。

〔参考文献〕

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻，2007，pp.43-56。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻，2008，pp.39-53。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻，2010，pp.95-104。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻，2011，pp.155-168。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻，2012，pp.129-140。